

## ・・・ 不況を乗り越え校風の培養 ・・・

大正時代の我が国は、政治、経済、文化のすべての面で急速な進展を遂げた。しかし、昭和に入ると様相は一変した。

大正末期から始まった不況は、昭和初期になって経済恐慌（昭和4年米国「暗黒の木曜日／ブラックサザデー」）となり、左翼思想の激化と官憲の弾圧、陸軍内部の急進派の暴走、政財界要人に対するテロ行為の続発など世情騒然とした中で、昭和6年に満州事変が勃発、満州国の誕生があり、軍右翼・ファッショ勢力の増大、やがて日華事変へと発展していった。

このような情勢の中で、本県教育は入学志願者の減少や中退者の増加、地方自治体の財政窮乏などと言う悪条件下で苦闘していた。卒業生の就職難も深刻な問題であった。また子弟に中等教育を受けさせようという教育熱も高まり、実業学校とくに商業科への入学志望者も著しく増加し、そのため年々入学難となったことから、その解決が叫ばれるようになった。

高田商工はこのような情勢下にありながら、満州事変勃発までは比較的自由な雰囲気、落ち着いて校風の培養に努めることができた。

昭和2年「校旗」、昭和4年には「校歌」が制定されようやく一人前になれたという感じで士気の高揚をはかることができた。高商祭の前身である展覧会が大正6年に開催されて以来年々拡充され、昭和5年の勅語発布40周年記念や翌年の創立15周年記念の展覧会は特に盛大で、本校の名を世に高め入学志願者増につながった。

しかしながら昭和4年の世界恐慌を機に、日本経済も景気が落ち込み巷に不景気風が荒れ狂い、中等学校志望者も減少の傾向となり、毎年応募の最高を誇る高田中学も昭和5年には定員に満たず、上越地方で定員を超過したのは本校商業科だけという様相を呈した。翌年の商業科の競争率は2.28倍の114名になった。この事実は実業界、教育界あげての学級増の運動に拍車をかけた。そして知事への5回の陳情も空しく、昭和10年に県会で否決されるに至った。

昭和7年度、この頃高田中学とのかけ持ち受験生が多く、両校共に合格した者が相当いたが、殆どが中学に行かず本校に入学してきた。本校の名実兼備への努力が認められた結果であろう。

昭和6年の満州事変以後、大陸進出の国策や国家主義思想が教育内容にも反映するようになってきた。集团的勤労作業運動の実施、軍事教練の強化等、教育は次第に戦力増強、戦争遂行の国策への従属を深めていった。入学試験も学力重視から体力中心に移り、体格検査が重視されるようになった。

軍国主義は本校にも魔の手を伸ばし、配属将校が置かれて軍事教練や集団勤労運動などがカリキュラムの主要を占めるようになっていく。この傾向は昭和12年日華事変の勃発により、強力な「国家総動員」の展開と共に益々激化。知識と技術を学ぶために本校に入学した生徒たちも学業どころでなかった。こうして日本の軍国主義はついに太平洋戦争へ突入。やがて本校からも在籍のまま特攻隊の「志願者」が続出するようになる。

## ◆就職難

当時の本校卒業生の進路状況を見ると、打ち続く不況の中企業倒産が相次いで求人需要は低下していた。本校では校長を先頭に県内はもちろんのこと、東京・名古屋・大阪・北海道と就職のための職場開拓に東奔西走し苦勞をしていた。

昭和2年3月の卒業生は商科36名、工科11名、計47名。このうち上級学校に進学する者5名、自営4名、残り38名は全部就職希望者であった。これら生徒の就職に関して当時の新聞は次のように報じている。

「新考案 売込帳大当たりを見た就職口に本多石介校長鼻高々」の見出しで記事が続く、「(略) 生徒の就職に関して、校長は例によって昨年末から手足をタコのように動かして売込みに尽力しているが、その売込みたるや、同校は甲種に昇格して日も浅く卒業生の分布も少ないので、この方面から引っ張ることがないので校長の売込みはむしろ辛辣で、売込み名簿には親族関係・成績人物考査等採点を注入し、統計表のようなものを作って生徒一人に対して約三口から四口に売りかけている。一方需要者側は相変わらず東京・大阪が中心で直接申し込んできたのは、松坂屋(東京・大阪店)、三越呉服店、山口銀行、エンパイヤー自動車(東京)、高橋製帽所(大阪)が主なるもので、このほかに市内及び新潟方面からの申込みもあり、今の所売り口には困らないが、生徒の就職希望、それに需要者の希望条件が面倒なので流石の本多校長もこれに閉口垂れている。それさえなければ困ることはない—と毎日売込名簿と首っ引きで、直筆の手紙を一日50本も書く、電報を飛ばす、校長と手塩にかけた生徒の飯櫃探しに身を腐らせる程だとある。」(昭和3年1月2日付高田日報/現代仮名遣いに直す)と苦勞の程が記されている。

進路方向決定の際の親子の意見の相違や、求人側の考えの違いについての教師の情は今も昔も変わらないものがある。

## ◆伊藤校長

昭和3年3月9日、本多校長の転出(巻中学校校長)に伴い、三条商工学校の伊藤彰校長が本校第3代校長として着任した。

伊藤氏は明治15年長崎県島原の生まれ。東京物理学校(理数科)卒業後、村松工業・長岡工業学校教諭、大正14年県立三条商工学校長に就任、昭和3年に本校着任。

伊藤氏の昭和11年までの8年余の在任期間は、国論が動揺、経済恐慌をきたし、やがて満州事変を機に軍国主義化の道を迎えることになるが、こういう情勢にあつて能く学校の内部を固め、学力や校風の培養に努め、卒業生の職場開拓に奔走した。

また校歌を制定し、創立15周年記念を立派に果たした。そして昭和9年木工・漆工2科を工芸科に統合(但し両分科として残す)し、文字通り商・工の2科とした。

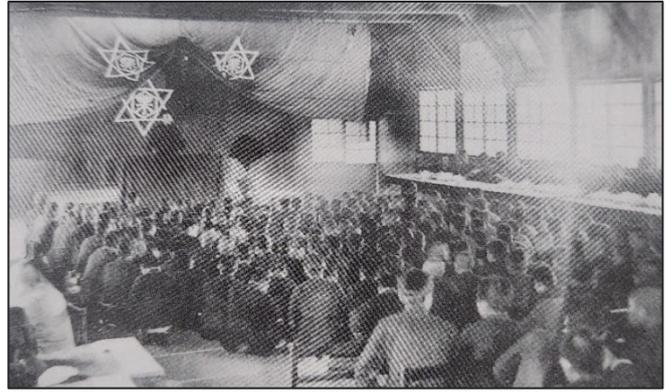
彼は物理学校出だけに慎重・計画的な執務振りは定評があり、謹厳・重厚・寡黙な人となりは市民に慕われた。一方スポーツ(庭球・スキー)を好み、自ら生徒を指導した。

ニックネームは「もう(牛)長」であった。牛小屋から引き出された牛のようなタイプだったと言われる。





昭和3年 陸上大運動会



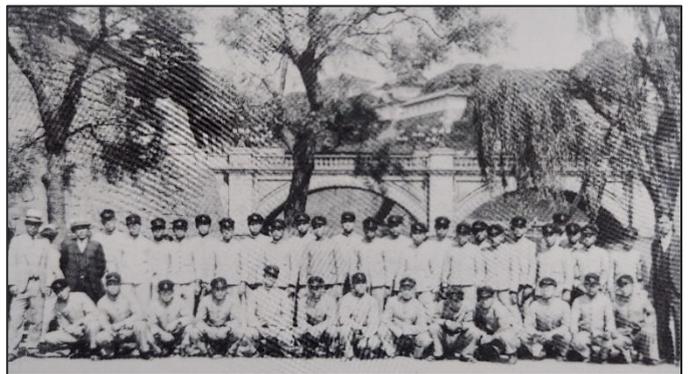
昭和4年 送別会



昭和5年当時の校舎（南城町3丁目）



昭和10年 実践室



昭和10年 修学旅行（皇居）